

(1) 表紙

博士論文（要約）

論文題目 鄭清文とその時代：

“本省人”エリート作家と戦後台湾アイデンティティの形成

氏名 松崎寛子

(2) 目次

序章

第一節	問題提起.....	3
第二節	論文の構成.....	6
第三節	先行研究.....	9

第一章 台湾作家鄭清文の生い立ちと作品の流れ

第一節	鄭清文の経歴.....	16
第二節	作家デビュー.....	17
第三節	「二つの幼年時代、二つの故郷」：農村と旧鎮の登場まで.....	18

第二章 歌に託した台湾アイデンティティ

第一節	「我要再回来唱歌」について.....	25
第二節	鄭清文作品における言語問題の描写.....	27
第三節	「雨夜花」.....	33
第四節	1979 年前後の台湾歌謡の地位.....	37
第五節	自己表現としての歌.....	39

第三章 教科書における鄭清文文学受容にみる台湾アイデンティティの変容：台湾の高校「国文」教科書における台湾文学の分析から

第一節	台湾における高校「国文」教科書の歴史.....	49
第二節	龍騰文化出版社「国文」教科書における鄭清文「我要再回来唱歌」：新検定制度の開始と「国文」教科書における台湾文学.....	58
第三節	「国文」教室における鄭清文文学.....	68
第四節	高校「国文」教科書における台湾文学の行方.....	70

第四章 鄭清文作品における日本統治期の記憶とアイデンティティの形成.....

第一節	鄭清文の日本統治期体験の記憶—語り手「私」.....	75
第二節	スティグマが意味するもの.....	89

第五章 『舊金山一九七二』における在米台湾留学生表象

第一節	鄭清文のアメリカ体験：『舊金山一九七二』について.....	107
第二節	『舊金山一九七二』とその時代.....	110
第三節	あいまいなアイデンティティの行方.....	115
第四節	『異邦人』としてのアイデンティティ.....	119

第六章 ノスタルジアとしての鄭清文文学とユートピアの形成

一 舞台劇『清明時節』と鄭清文童話における台湾アイデンティティ

第一節 文学テキストについて.....	128
第二節 舞台劇『清明時節』	143
第三節 鄭清文童話におけるユートピア—『天燈・母親』	156
終章.....	168
参考文献	

(3) 本文

博士論文の全部はすでに出版契約がされており、全文公表することができません。

書誌情報

著者：松崎寛子（まつざき・ひろこ）

書名：鄭清文とその時代——郷土を愛したある台湾作家の生涯と台湾アイデンティティの変容

出版年月日：2020年6月30日

発行所：東方書店

ISBN978-4-497-22011-0 C3098

(4) 参考文献一覧

◇日本語（著者五十音順）

- アルベエル・カミュ（窪田啓作訳）『異邦人』新潮文庫、1954 年
- アーヴィング・ゴッフマン（石黒毅訳）『スティグマの社会学—烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房、2003 年
- 稲沢秀夫『スタインベックの世界』思潮社、1978 年
- 今村楯夫『ヘミングウェイと猫と女たち』新潮社、1990 年
- イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店、1996 年
- イ・ヨンスク「アジアの植民地から読むアルベール・カミュ」『週刊朝日別冊・小説 STRIPPER』第一〇二巻第四六号通巻四二二三号一九九七年秋季号、1997 年
- 今福龍太・沼野允義・四方田犬彦編『世界文学のフロンティア 4 「ノスタルジア」』岩波書店、1996 年
- エドワード・W・サイード（大橋洋一訳）『文化と帝国主義 1』みすず書房、1998 年
- エドワード・W・サイード（大橋洋一訳）『文化と帝国主義 2』みすず書房、2001 年
- F.デーヴィス（間馬寿一・荻野美穂・細辻恵子訳）『ノスタルジアの社会学』世界思想社、1990 年
- 上野千鶴子「李昂の新しい冒険—〈女〉と〈女たち〉をめぐる物語」『東方』No. 293、2005 年
- 王拓（松永正義、宇野利玄訳）「現実主義」文学であって「郷土文学」ではない『彩鳳の夢—台湾現代小説選 I』研文出版、1948 年
- 岡崎郁子『台湾文学異端の系譜』田端書店、1996 年
- 小笠原欣幸「馬英九政権論（その 2）」<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/paper/mayingjieou2.html>
- 尾高煌之助等『アジア長期経済統計 1 台湾』東洋経済新報社、2008 年
- 片岡巖『台湾民俗誌』台湾日日新報社、1921 年
- 洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001 年
- 黄春明（田中宏・福田桂二訳）『さよなら・再見』めこん、1979 年
- 呉濁流『夜明け前の台湾—植民地からの告発』社会思想社、1972 年
- 小林伸夫『台湾経済入門』日本評論社、1995 年
- 坂元ひろ子『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』岩波書店、2004 年
- 渋谷区立松濤美術館『張大千の絵画』渋谷区立松濤美術館、1995 年
- 白水紀子『中国女性の 20 世紀—近現代家父長制研究』明石書店、2001 年
- 新竹州役所編『新竹州要覧』昭和八年版(二) 6 頁、台湾:成文出版、1985 年
- 台湾教育会『台湾教育沿革史』台湾教育会、1939 年
- 台湾女性史入門編纂委員会『台湾女性史入門』人文書院、2008 年
- 台湾総督府『小学校唱歌教授法』台湾総督府、1913 年
- 台湾総督府『公学校唱歌；第一、三、四学年用』台湾総督府、1936 年

台湾総督府警務局『大詔渙発後に於ける島内治安状況並びに警察措置』、台湾総督府警務局、昭和 20 年（1945 年）8 月

台湾総督府師範学校規則改正第二十條『近代日本教育制度史料/近代日本教育/第 9 卷』講談社、1956 年

高野泰志『引き裂かれた身体—ゆらぎの中のヘミングウェイ文学』松籟社、2008 年

陳芳明(森幹夫訳、志賀勝監修)『謝雪紅・野の花は枯れず』社会評論社、1998 年

鄭清文(岡崎郁子訳)『阿里山の神木—台湾の創作童話』研文出版、1993 年

桃園郡役所編『桃園郡要覧』昭和十二年版 6 頁、台湾:成文出版、1985 年

白先勇(山口守訳)『台北人』国書刊行会、2008 年

フェイ・阮・クリーマン(林ゆう子訳)『大日本帝国のクレオール—植民地期台湾の日本語文学』慶応義塾大学出版会、2007 年

樋口靖『台湾語会話』東方書店、1992 年

藤井省三『魯迅「故郷」の読書史』創文社、1997 年

藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、1998 年

藤井省三『中国語圏文学史』東京大学出版会、2011 年

藤井省三「侯孝賢が台湾百年史映画を創るとき」『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』あるむ、2012 年

藤井(宮西)久美子『近現代中国における言語政策』三元社、2003 年

ベアトリス・フォンタネル(吉田晴美訳)『図説ドレスの下の歴史』原書房、2001 年

ベネディクト・アンダーソン(白石さや・白石隆訳)『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版、2003 年

彭瑞金(中島利郎、澤井律之訳)『台湾新文学運動四〇年』東方書店、2005 年

マーシア・コーエン(森泉弘次、宮内華代子訳)『世界を変えた女性たち—現代アメリカ・フェミニズム史』誠信書房、1996 年

松崎寛子「作家インタビュー：鄭清文とその時代、その作品」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 8 号、2005 年

松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』慶応義塾大学出版会、2006 年

松永正義ほか訳『三本足の馬—台湾現代小説選査Ⅲ—』研文出版、1985 年

水林章「サイドとともに読む『異邦人』—植民地的無意識のエクリチュール」『みすず』No. 528、第四七巻第五号、みすず書房、2005 年

三野博司『カミュ『異邦人』を読む—その謎と魅力』彩流社、2002 年

村上春樹『意味がなければスイングはない』文芸春秋、2005 年

村上嘉英『現代閩南語辞典』天理大学出版部、1981 年

山口守編、藤井省三著『講座台湾文学』国書刊行会、2003 年

山崎直也『戦後台湾教育とナショナル・アイデンティティ』東信堂、2009 年

矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』岩波書店、1988 年

葉石濤(中島利郎、澤井律之訳)『台湾文学史』研文出版、2000 年

吉田荘人『人物で見る台湾百年史』東方書店、1993 年

頼美鈴「日治時期台湾音楽教科書研究」『2000 年度財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者交流事業報告書』交流協会、2001 年

ランディ・シルツ(藤井留美訳)『MILK ゲイの市長と呼ばれた男ハーヴェイ・ミルクとその時代』祥伝社、2009 年

李昂(藤井省三訳)『自伝の小説』国書刊行会、2004 年

林初梅『「郷土」としての台湾—郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』東信堂、2009 年

若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房、2001 年

若林正文『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008 年

◇中国語（著者五十音順）

王健任紀錄整理「相約在清明時節 吳念真x鄭清文」『聯合文學』311 期第 26 卷第 11 期、2010 年

歐素瑛『傳承與創新—戰後初期臺灣大學的再出發(1945-1950)』國立編譯館、2006 年

王拓「是「現實主義」，不是「鄉土文學」」、『仙人掌雜誌』第一期第二卷、1977 年

汪知亭『臺灣教育史料新編』台灣商務印書館、1978 年

柯慶明「高中国文課程綱要之擬定」『文訊』228 期 2004 年

何寄彭「讓国文教育回歸其本質」『文訊』226 期 2004 年

何清欽『光復初期之台灣教育』復文圖書出版社、1980 年

簡上仁「台灣民俗歌謠的老園丁—周添旺」『可口月刊』1979 年 12 月

簡上仁「談光復前本省古老歌謠的價值和意義」『台灣時報』1980 年 3 月 19 日

簡上仁『台灣音樂之旅』自立晚報社、1988 年

翰林出版『高級中学国文』翰林出版、2000 年

翰林出版『高級中学国文』翰林出版、2007 年

北加州台灣同鄉聯合會『三十而立：北加州同鄉聯合會成立三十周年特刊』San Jose、北加州台灣同鄉聯合會、2003 年

教育部『修訂中學課程標準』教育部、1948 年

教育部『高級商業職業學校暫行課程標準』教育部、1953 年

教育部『高級中学課程標準』教育部、1971 年

教育部「高級中学国文科課程標準」教育部、1995 年

教育部『普通高級中学課程暫行綱要』教育部、2005 年

教育部統計處『中華民國教育統計-民國 96 年版』教育部、2007 年

教育部ホームページ <http://www.edu.tw>

許俊雅「失去舞台的小人物—談洪醒夫及其小說<散戲>」『人文及社会学科教学通訊』第十卷第三期、1999 年

許振江記錄「鄭清文作品研討會」『文學界』第二集、1982 年

阮淑芳「「散戲」一文的章法與文学手法」『国文天地』第 14 卷第 11 期、1999 年

谷巴「春雷」『自立晚報副刊』1987 年 6 月 29 日

康熙出版『高級中学国文』康熙出版、2000 年

康熙出版『高級中学国文』康熙出版、2007 年

黃宣範『語言、社会與族群意識—台灣語言社会学的研究』文鶴出版、1993 年

江寶釵・林鎮山主編『樹的見證—鄭清文文學論集』麥田出版、2007 年

『公論報』「省參會召開座談會，討論臺大招生問題」『公論報』1948 年 8 月 15 日

國文新天地整理「鄭清文—談「我要再回来唱歌」」『國文新天地』第 3 期、龍騰文化、2002 年

國文新天地整理「作家身影系列講座精彩報導」『国文新天地』第 3 期、龍騰文化、2002 年

國立編譯館『高級中學國文教科書』國立編譯館、1996 年

國立編譯館『高級中學教師手冊』國立編譯館 1996 年

吳三連・蔡培火等『台灣民族運動史』自立晚報、1971 年

吳俊升『中華民國教育誌』中華文化出版事業委員會、1955 年

吳文星等編『日治時期台灣公學校與國民學校 國語讀本、解說・總目次・索引』南天書局、2003 年

蔡源煌「鄭清文的第一人稱小說」『中外文學』第 8 卷第 12 期、1980 年

三民出版『高級中學國文』三民出版、2000 年

三民出版『高級中學國文』三民出版、2007 年

施懿琳等『彰化文學大論述』五南圖書、2007 年

史坦貝克『The Red Pony 小紅馬』正文書局、1972 年

蕭蕭「台灣高中國文教科書的「現代文學」教學內容檢討」『聯合文學』第 107 期、1993 年

『自由時報』2002 年 11 月 30 日

自由時報『自由時報』2002 年 12 月 6 日

筱玉「不要亂丟「魚」—黃春明作品不能選為國中教材?」『大學雜誌』第 91 期、1975 年

鍾肇政「鄭清文和他的「簸箕谷」」『自由青年』第 35 期、1966 年

徐錦成『鄭清文童話現象研究—台灣文學史的思考』秀威、2007 年

『自立早報』「410 教改大遊行為下一代而走」『自立早報』1994 年 4 月 10 日

莊永明『台灣歌謠追想曲』前衛、1994 年

莊萬壽「「變」!待變的語文教育—台灣語文教育的新展望」『國文新天地』第 8 卷第 3 期、1992 年

搶救國文連盟「讓教育問題回到教育專業上來」『國文天地』第 21 卷第 2 期 2001 年

台灣省政府教育廳『十年來的臺灣教育』台灣省政府教育廳、1955 年

台灣省政府民政廳『中華民國 台灣人口統計 民國五十八年』台灣省政府民政廳、1969 年

台灣民報「歌仔戲要怎麼禁」『台灣民報』1927 年 1 月 9 日

台灣民報「歌仔戲的流弊」『台灣民報』1927 年 7 月 10 日

中華日報「丟掉那條魚」『中華日報』1975 年 8 月 15 日

『中國時報』2010 年 9 月 9 日

趙家璧主編『中國新文學大系』上海良友圖書公司、1935 年~1936 年

頂潔主編『國立台灣大學校史稿』臺大出版中心、2005 年

趙公正「解讀高中國文—洪醒夫的〈散戲〉」『國文天地』第 15 卷第 6 期、1999 年

陳雅玲「古文教育孔孟教育的式微危機」『商業周刊』第 922 期 2005 年

陳奇祿等著『從帝大到臺大』國立台灣大學、2002 年

陳君玉「日據時期台語流行歌概」『台北文物』第四卷第二期、1955 年

陳庭茂『陳文成博士紀念集』深耕印刷廠有限公司、1982 年

陳萬益「解除緊箍咒—給國文教學一條活路」『國文天地』第 8 卷第 1 期、1992 年

陳芳明『謝雪紅評傳—落土不凋的雨夜花』前衛、1991 年

陳芳明「一位精神盟友的復活—紀念陳文成博士殉難十週年」『夢的重點』聯合文學、1998 年

鄭遠禎「散戲之後論洪醒夫〈散戲〉之敘事結構任務塑造與象徵」『國文天地』第 15 卷第 6 期、1999 年

鄭恆隆·郭麗娟『台灣歌謠臉譜』玉山社、2002 年

鄭谷苑『走出峽地 鄭清文的人生故事』、麥田出版、2007 年

鄭清文『校園裡的椰子樹』三民書局、1970 年

鄭清文『燕心果』號角出版社、1985 年

鄭清文『大火』時報文化、1986 年

鄭清文『滄桑舊鎮』時報出版、1987 年

鄭清文『報馬仔』圓神出版社、1987 年

鄭清文『台灣文學的基點』派色文化出版、1992 年

鄭清文『故里人歸』台北縣立文化中心、1993 年

鄭清文「偶然與必然—文學的形成」『文學台灣』第 26 期、1998 年

鄭清文『水上組曲/鄭清文短篇小說全集:卷一』麥田出版、1998 年

鄭清文『合歡/鄭清文短篇小說全集:卷二』麥田出版、1998 年

鄭清文『三腳馬/鄭清文短篇小說全集：卷三』麥田出版、1998 年

鄭清文『最後的紳士/鄭清文短篇小說全集；卷四』麥田出版、1998 年

鄭清文『秋夜/鄭清文短篇小說全集：卷五』麥田出版、1998 年

鄭清文『白色時代/鄭清文短篇小說全集：卷六』麥田出版、1998 年

鄭清文『鄭清文和他的文學/鄭清文短篇小說全集：別卷』麥田出版、1998 年

鄭清文『小國家大文學』玉山社、2000 年

鄭清文『天燈・母親』玉山社、2000 年

鄭清文『舊金山一九七二』一方出版、2003 年

鄭清文『峽地』九歌出版社、2004 年

鄭清文『多情與嚴法』玉山社、2004 年

鄭清文『丘蟻一族』玉山社、2009 年

鄭清文「我寫〈清明時節〉」『自由時報』2010 年 10 月 3 日

桃園縣政府『鐘肇政全集二六書簡集（四）』桃園縣文化局、2002 年

董炳月「歷史風俗畫與心靈備忘錄（上）一評「鄭清文的小說」」『幼獅文藝』第二期、1995 年

東大出版『高級中學國文』東大出版、2000 年

杜國清『台灣精神的崛起』、春暉、1989 年

杜文清『大家來唱台灣歌』台北縣立文化中心、1993 年

內政部統計年報ホームページ <http://sowf.moi.gov.tw/stat/year/list.htm>

南一出版『高級中學國文』南一出版、2000 年

南一出版『高級中學國文』南一出版、2007 年

薛化元『台灣開發史』三民書局、1999 年

方師鐸『五十年来中国国語運動史』国語日報、1996 年

彭瑞金「大王椰子《二十年來的鄭清文》」『台灣文藝』第 56 期、1977 年

彭瑞金『台灣新文學運動 40 年』春暉出版社、1998 年

香港文學研究社主編『中國新文學大系續編』香港文學研究社、1968 年

『民生報』2005 年 1 月 4 日

游鑑明『日據時期台灣的女子教育』國立台灣師範大學歷史研究所碩士論文、1988 年

楊子霈「體會冰山下的沈靜與騷動-關於鄭清文小說及現代小說教學的一些想法」『國文學科中心』第 27 期、2007 年 12 月

葉曙『閒話臺大四十年』傳記文學雜誌社、1989 年

葉石濤「評校園裡的椰子樹」『幼獅文藝』第 28 期 1968 年

葉石濤「這一年來的省籍作家及其小說」『台灣文藝』第 27 期、1970 年

葉石濤『台灣文學史綱』春暉出版社、1987 年

余可柔「百億教科書市場爭霸戰」、『財訊』第 249 期、2002 年 12 月

藍順德「教科書開放政策的演變與未來發展趨勢」、『國立編譯館 館刊』31 卷、復刊号、3-11、2003 年

李園會『臺灣光復時期與政府遷臺初期教育政策之研究』當代文化出版社、1983 年

李喬「舊鎮的椰子樹」『水上組曲/鄭清文短篇小說全集;卷一』麥田出版公司、1998 年

李志傳「談台灣音樂的發展」『台北文獻 直字第十九,二十合刊』台北市文獻委員會、1971 年

龍騰文化出版『高級中學國文』龍騰文化出版、2000 年

龍騰文化出版『高級中學國文教學手冊』龍騰文化出版、2000 年

龍騰文化出版『高級中學國文』龍騰文化出版、2007 年

龍騰文化出版『高級中學國文教師手冊』龍騰文化出版、2007 年

劉梓潔訪問「冰山理論的實踐者鄭清文」『聯合文學』22：10：262，2006 年

劉敏光「台灣音樂運動概略」『台北文物』第四卷第二期、1955 年

劉湊採訪與紀錄「開放與限制—範文 編選的時間限制與設計模式的空間限制」『國文天地』第 15 卷 5 期、1999 年

廖炳惠『關鍵詞 200：文學與批判研究的通用辭彙編』麥田出版、2003 年

綠光劇団のオフィシャル HP <http://www.greenray.org.tw/main/index.php>

綠光劇團的部落格 <http://greenraytheatre.pixnet.net/blog>

林海音「台籍作家的寫作生活」『文星』第五卷第二期總號第二十六期 1960 年

林翠真「析論當前高中国文教科書中台灣文學作品的編選及註釋」『島語』第 2 期、2001 年

林梵「悲憫與同情—鄭清文的小說主題」『文學界』第二集、1982 年

林二「我寫台灣民俗歌謠作家列傳」『聯合報副刊』1978 年 1 月 30 日

林二・簡上仁合編『台灣民俗歌謠』眾文圖書、1979 年

林良哲「由落地掃到歌仔戲一日治時期歌仔戲發展過程初探」『宜蘭文獻雜誌』38、宜蘭縣立文化中心、1999 年

『聯合報』1981 年 7 月 8 日

『聯合晚報』2010 年 2 月 1 日

呂泉生「我的音樂回想」『台北文物』第四卷第二期、1955 年

盧先志「試探洪醒夫短篇小說—〈散戲〉中人物的象徵意義」『明道文芸』第 241 号、1996 年

◇ 英語（アルファベット順）

Cheng Ch'ing-Wen. *Three-Legged Horse*, New York, Colombia University Press, 1999. David E. Kaplan, *Fires of the Dragon: Politics, Murder, and the Kuomintang*, New York, Atheneum, 1992.

Desmond Morris, *Bodywatching*, NY, Random, 1987.

Ernest Hemingway, *The Garden of Eden*, NY, Scriber, 1986.

Ernest Hemingway, *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, New York, Charles Scribner's Sons, 1987.

Ernest Hemingway, *For Whom the Bell Tolls*, NY, Scribner, 1996.

Erving Goffman, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs, N.J., Prentice-Hall, 1963.

Faye Yuan Kleeman, *Under an Imperial Sun: Japanese colonial literature of Taiwan and the South*, Honolulu, University of Hawaii Press, 2003.

Fred Davis, *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, New York, The Free Press, 1979.

Leo T.S. Ching *Becoming "Japanese": Colonial Taiwan and the Politics of Identity Formation*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 2001.

Tzeng Ching-wen. *Magnolia: Stories of Taiwanese Woman*, Center for Taiwan Studies, University of California, Santa Barbara, 2005.

Maurice A. Lee, *The Border as Fiction: Writers of Taiwan*, Toronto, Quattro Books, 2010.

U.S. Government Printing Office, *Taiwan Agents in America and the Death of Prof. Wen-Chen Chen: Hearings before the Subcommittees on Asian and Pacific Affairs and on Human Rights and International Organization of the Committee on Foreign Affairs House of Representatives Ninety-Seventh Congress*. July 30 and October 6, 198

（５）論文の内容の要旨

台湾は十七世紀以来、オランダ植民統治、鄭氏政権と短期間による局地的支配を受けた後、清朝、日本、旧国民党による長期間の統治を経験した。このような長きに渡る外来政権による支配下であって、台湾に住む人々は越境してくる外来政権の文化を積極的に受容しながらも、それらを抵抗の糧としつつ、自立の道を模索し続けた。そして 1980 年代前後に本格化した民主化運動を経て、1996 年台湾住民による総統直接選挙を実現し、台湾は民主化を達成したのである。

台湾は、戦前から台湾に住む本省人、戦後国民党と共に中国大陆から渡って来た外省人に分かれ、本省人は、人口の大多数を占める福建（閩南）系漢民族、客家系漢民族、そして上記漢民族系よりもはるか前からの住民とされる「原住民」からなり、多重族群社会を構成している。それぞれの人口比は 1992 年の時点で、福建（閩南）系 73.3%、客家系 12%、外省人 13%、原住民 1.7%（黄宣範『語言，社会與族群意識』1993）とされている。このような複雑な歴史背景も加わり、台湾アイデンティティについての台湾住民自身の意識は今も変化を続けているのである。このような台湾アイデンティティの状況を、国際政治学者の若林正丈は「変容し躊躇するアイデンティティ」と定義する。

このような台湾アイデンティティ形成において、文学が果たした役割は大きい。五十年に及ぶ日本統治期には、日本語という国語で、そして戦後旧国民党統治期には北京語という国語で、台湾の文学者の多くの者は、作品を書いた。特に日本語から北京語への国語の転換は、台湾の文学者にとって、アイデンティティの転換でもあったのだ。

鄭清文は日本統治期すなわち日本語国語体制下で小学校教育を終え、国民党統治期すなわち北京語国語体制下で中等教育から大学教育を受け、銀行員として勤務するかたわら、作家活動を行ってきた戦後第二世代作家である。日本でも『広辞苑』第六版（2008）が「ていせいぶん【鄭清文】」の項目で、「台湾の作家。農村と都市のさまざまな人生を描く。作「三本足の馬」。」と記している。

本稿は、日本統治期に少年期を過ごし、戦後に中国語を身に付けた本省人エリートとして、鄭清文が、外省人で占められていた台湾文壇において活躍の場を徐々に広げながら、自らのアイデンティティを模索し続け、文学創作を通して台湾アイデンティティを形成していく過程を、その時代背景と合わせて考察するものである。1958年に中国語作家としてデビューした鄭清文は、1987年に呉三連文藝獎を獲得し、1999年には英訳作品集『Three-Legged Horse』がコロンビア大学から出版され、2005年には國家文藝獎を表彰される等、確実に作家としての評価を高めて行った。

日本統治期から旧国民党統治期を経て現在に至るまでの激動の台湾史は、鄭清文の作品にどのような影響を与えたのか。換言すれば、鄭は彼の見た台湾社会をどのように描いたのだろうか。そして鄭清文文学は、台湾社会でどのように受容されてきたのだろうか。本稿では、以上の問題点を踏まえながら、二つの時代、二つの言語を跨いだ台湾作家鄭清文とその時代史を考察したい。

第一章では、鄭清文の生い立ちと、1958年から1974年まで、鄭清文が文壇にデビューして以後の初期作品の流れについて論じる。鄭清文は1932年、日本統治期の台湾西北部に位置し、台北に隣接する農村、桃園に生まれ、一歳の時に新莊の叔父に養子に出される。農村の桃園と後に鄭の作品に登場する「旧鎮」新莊、この二つの家族と土地に育てられた経験は鄭の作品に大きな影響を与えている。

第二章では、1979年の作品「我要再回來唱歌（以下「唱歌」と省略）」を中心に、鄭清文の作品のなかでどのように台湾アイデンティティが語られるようになったかを分析する。「唱歌」において、伝統社会の価値観と女性の自己表現との衝突を語る時、何故鄭清文は「歌を歌うこと」を主題としたのかという問題を中心に論じる。そしてその主題に隠されている都市と農村との文化的格差、世代間の言語衝突の問題を検討する。「唱歌」が発表された1979年以降、鄭清文は自分が育った旧鎮を舞台にした自伝的要素の強い作品を数多く発表するが、同時に「不良老人」（1984）、「熠熠明星」（1985）、「報馬仔」（1987）、「來去公園飼魚」（1990）等、徐々に旧国民党政府を暗に批判する作品も発表ようになる。「唱歌」は、文化的格差から起こる衝突という初期鄭文学の主題を引き継ぎながら、世代間の言語衝突も描写する作品である。鄭清文は、「歌を歌う」という行為の描写を通して、旧国民党政府への批判を表そうとしたのではないか。1979年美麗島事件前後という台湾の時代情勢も、「唱歌」をターニングポイントとして、台湾意識を作品の中で主張するようになった原因の一つとして、考察する。

第三章では、前章を受けて、1999年に台湾の高校国語教科書に採用された鄭清文「我要再回來唱歌」を例に、台湾国語教科書における台湾文学の受容とそれに伴う台湾アイデンティティの変容について検討する。まず、1996年現代台湾文学作品が初めて高校「国文」教科書に採用されるに至り、1999年「一綱多本」制への移行を経て、2005年に「一綱多本」に対応する指導要領を教育部が公布するまでの、台湾における高校「国文」教科書編纂の移り変わりを分析し、龍騰文化出版社版に収められた鄭清文「我要再回來唱歌」を例に、1999年に初めて民間出版社編纂の教科書に採用された現代台湾文学作品が、教師用指導書で如何に解釈されているか、そして2005年教育部の指導要領改定後にその解釈がどのように変化したかに注目する。同時に、高校「国文」教師の授業報告に基づき、「国文」教室の現場で台湾作家鄭清文の作品が具体的にどのように教授されているのかを考察する。

第四章では、鄭清文作品において描かれた日本統治期の記憶をめぐり、鄭の日本統治期の体験とその叙述が鄭のアイデンティティ形成に与えた影響について論じる。鄭の幼年時代はちょうど日本統治期と重なっており、その記憶は彼の短編小説「三脚馬」（1979）「髮」（1989）「蛤仔船」（1989）において語られていると言えよう。この三つの作品に共通しているのは、語り手「わたし」が一貫して傍観者であること、物語は「わたし」に他人から語り伝えられた

話であること、主要登場人物は必ずスティグマを持っていること、そしてそのスティグマの犠牲となるのは、スティグマの持ち主が男性であるか女性であるかに関わらず、必ず女性であることである。奇形の手を持つ女性を描いた「校園裡的椰子樹」（1967）以来、鄭は長編小説「舊金山-1972」（1997）、童話「天燈・母親」（1997）等、いくつかの作品の登場人物にスティグマを持たせているが、鄭自身の幼年時代＝日本統治時代の記憶を描いた上記三作品にもスティグマを持つ人物を登場させたのは何故であろうか。また、鄭清文はヘミングウェイが自らの創作に大きな影響を与えていると述べているが、本章では、ヘミングウェイの作品における身体的欠如の扱い方が鄭清文作品における身体表象に与えた影響に注目する。そこから、植民地言語である日本語を通して英語を勉強した鄭清文が、どのようにヘミングウェイ作品から影響を受け、自身の創作に反映させたかを考察する。

第五章では、鄭清文が1990年から2001年にかけて発表した長編小説『舊金山（サンフランシスコ）——一九七二』について論じる。彼は1972年、銀行実習勤務のためサンフランシスコに半年間滞在し、その経験を基に長編小説『舊金山——一九七二』を執筆する。この長編小説には、鄭自身と思われる人物は登場せず、一人の台湾女性の留学生が鄭の在米経験に類似した体験を語っている。女性主人公は、米国において自分は何者であるかという意識をはっきり持てないまま、父や叔父およびボーイフレンドの意に反して台湾へ帰ることを決める。彼女の台湾への深い愛着は、家族の誰からも愛されない、鼻がつぶれた祖母に向けられるものであった。七〇年代は台湾にとってその国際的地位を揺るがされた時代であり、多くの台湾作家にとっても自分が何者であるかを模索する時代でもあった。

異国において自分のアイデンティティを模索する女性を描くことで、鄭は自身の台湾アイデンティティを表現したのではないかと推察される。鄭が同作の中でカミュの『異邦人』を取り上げているのに対し、本稿は、エドワード・サイードによるポストコロニアル的な視点からのカミュ批判を援用しつつ、鄭清文が当時日本語で『異邦人』を読むことによって「植民者」側によるカミュの解釈を受け入れた後、自らのアメリカ体験を踏まえてどのように「被植民地者」の立場から自らの『異邦人』解釈を作品に表したのかを考察する。

第六章では、鄭清文の文学作品が、現代の台湾社会においてノスタルジア文学として受容されている点について論じたい。鄭清文の初期作品である二編の短編小説、「苦瓜」（1968年）と「清明時節」（1969年）は、2010年に呉念真監督によって舞台劇『清明時節』に戯曲化された。本章では、鄭清文の文学作品が、文学テキストから演劇脚本へと改編され新しいテキストへと変容していく過程を、その時代背景も視野に入れながら検証する。さらに、1960年代の鄭文学が現代の舞台で60年代台湾社会へのノスタルジアとして再現されたことを考察した上で、鄭清文自身は後にどのように記憶の中の台湾へのノスタルジアを童話の中で再現したのかを論じる。

終章では、鄭清文とその時代について、台湾アイデンティティ形成の文化的社会的意義を総体的に検討し、その特徴を明らかにするとともに、鄭清文の作品が台湾社会にどのように受け入れられているかについて述べる。また台湾の歴史体験と集団の記憶が、文学作品の中でどのように描かれ、また書き換えられていくのかを検討する。